

藤原道長の史的意義

大津透（東京大学）

従来の藤原道長像は、クーデターと陰謀により後宮を制覇し外孫を即位させ、権力を自由に行使し、栄華をきわめたというもので、「国策上の事績は皆無」とされた。その象徴とされるのが、自らの娘が三后となったときの「この世をば」の歌とされる。

しかしこの三〇年ほど古記録と儀式書の読解が進み、平安時代中期の政治制度の解明が進み、また受領の位置づけを中心に摂関期の国家構造がイメージできるようになった。それをふまえ、道長の政治のあり方とその意義を再評価することを試みたい。政治制度の中心となったのは、中納言以上の公卿が上卿として代表して政務を決済する「政」と参議以上の公卿が合議する「定」があり、とくに後者の陣定において、道長は筆頭大臣である一上左大臣の地位で積極的に合議に参加した。道長はほとんど摂政関白になったことはなく、内覧・一上として太政官での議論を主導したのである。陣定では、受領功過定や受領申請雑事定など、公卿による受領に対する財政的な統制に大きな役割をはたしたが、罪名定や改元定など国家の重要事項が議題となった。公卿の意見が分かれた場合、意見の統一がはかられず、最終決定は天皇・摂関にゆだねられたとはいえ、陣定での公卿議定にはかなりの重みがあった。また道長が一上として行った除目・叙位については、天皇と一上に決定権があるのだが、公卿が御前に参列していることの意味はあるだろう。道長の権力は、公卿連合による太政官政治の上に築かれていたといえる。

道長の文化的意義については、無量寿院・法成寺の造営など仏教の面が有名だが、作文の開催による漢詩の盛行や、政治的なモニュメントとしての屏風歌の作成により和歌の発展にも寄与した。大嘗祭御禊での女御代行列などの新たな華やかな儀式を作ったり、仮名文学への援助など、女性・女房の世界に文化の基盤を拡大したことも特筆できる。